今井城跡（Fig.47）　今井氏の本拠地を西から望む尾根に所在する。山側に緩やかな尾根が続く北西側を２条の堀切で遮断しており、堀切３から堀切１までを縄張りとすれば、その全長は85mを測る。北東部は広く造成され、畑となっている。中心部には３段の平場あるいは曲輪が観察できるが、曲輪１と２の間には0.3mの不明瞭な段差があるのみである。曲輪２と３の比高差も最大1.2m程度であるが、切岸の南面では下端がやや溝状を呈し、段差の存在自体は明瞭である。曲輪２の東西幅は14mを測る。なお、曲輪３の周囲などでの明確な切岸は確認できなかった。堀切１は幅4.6mで、深さは山側2.2m、谷側0.2mを測り、現状では堀切というより切岸に竪堀が連結したものともいえる。堀切２と３の間隔は9.3mで、堀切２は幅4.4m、深さ城内側1.7m・城外側1.3m、堀切３は幅3.5m、深さ城内側1.2m・城外側0.4mを測る。北西方向に緩やかな尾根が続く点が防御上の問題点であるが、同方面の堀切の規模は大きいとは言えず、高い切岸もない。上記のような遺構の状態からは強力な防御性が看取できず、大規模な戦闘に対応する戦略的な性格は想定し難い。本城跡の性格については山裾の集落との関連が考えられ、先述した今井氏が使用した可能性が考えられる。今井氏の居所がある下村の中核部は、付図２のように交通路の結節点である川口地区に接している。なお、長宗我部地検帳（以下地検帳）では本城跡に関する記事はなく、「地頭分風土記差出扣」[40]に今井居城との記載がある。

大河内城跡（Fig.48）　鏡川と谷に挟まれた尾根上に所在する。Fig.48東側の比較的緩い斜面は造成されて遺構の有無も判断困難だが、詰の先端から現在の村道が通る括れ部までの長さは53mを測る。詰は平坦で、長さ30m、幅10mを測る。詰の東から南縁には最大高1.4mの土塁が巡るが、構造等は不明である。詰の曲輪面と北東側の畑との比高差は2.5m、その畑からさらに北東側の帯状の畑への比高差は4.7mを測る。詰の周りは切岸であるが、南側は急な自然斜面である。一帯は畑として利用されていることから、縄張の把握には難しい部分もあるが、小規模な城であることは首肯できる。また東側斜面や、北へ続く尾根が緩やかであるといった弱点を克服するような強力な防御施設も想定し難い。城の立地的には、鏡川に沿う要路と西の行川方面へ向かう道の交差点に近く、それらの道を眼下に望むことができる。地検帳では、現在も若干の家屋が建つ北西側に小規模なヤシキが記されているが、城に関する記事はない。現小字は「ショガモリ」である。

横矢城跡（Fig.49）　比較的緩やかな尾根上に所在する。墓地としての造成が進んでおり、中でも図中東部の墓地とそれに至る小径は近年のものである。全容の復元は困難であるが、現状で墓地となっていない曲輪１は長さ19.8m、幅8.7mを測り、数十cm大の石が幾つか存在する。西部で尾根を越える村道から曲輪１東端までは70mを測るが、村道付近一帯は緩やかな地形で、最寄りの住民によれば、かつては畠であったという。積極的に城に伴うものと認められる切岸は確認できず、自然地形とみられる斜面には、例えば行川城跡や梅ノ木城跡のような険しさはない。村道までを縄張としても小規模で、地形的にも弱点が目立つにもかかわらず、十分な防御施設は積極的には認められない。不明部分は多いが、上記の諸事項からは防御性の不十分さが指摘される。北側に接して緩傾斜地が展開し、名の中核部とも近いことなども考慮すると、村落との関わりが深い城であった可能性

が考えられる。現在も家屋が並ぶ城の北側には、地検帳でも２筆の下ヤシキと１筆の下々ヤシキが記されており、やはり生活域から隔絶された要害といった観はない。このような類例は大河内城跡でみられた。なお、地検帳では城に関連する記事はない。

西ノ森城跡（Fig.45）　蛇行する鏡川と谷によってＶ字型に挟まれた尾根上に所在する。長軸13mの詰と細長い帯状の曲輪を有する簡単な縄張りの城で、堀切１と堀切３の距離は約70mを測る。詰の規模は本稿対象の城跡中でも小さいが、平坦に整形され、西縁には下幅２m、高さ0.3m、長さ６mの土塁が観察される。帯曲輪等は北から西側にかけてのみ構築されており、曲輪２の東端部は幅7.2mと詰に次いで広い。堀切１は幅４m、深さは城内側２m・城外側0.2mを測る。堀切２と３の間隔は５mで、前者は幅3.8m、深さは城内側２m・城外側１m、後者は幅3.3m、深さは城内側２m・城外側0.4mを測る。堀切３の外側はさらに数十cmの段差が作られた結果、土塁状の高まりと幅2.8mの平場が現出している。北西斜面にある２条の竪堀は、各々幅3.1mと2.8m、深さ0.5mと0.4mと浅く、それらの上端は幅1.5mまでの通路状の平場を切っている。詰の周囲は傾斜の急な南西側を除いて切岸になっているとみられる。詰と曲輪２東端部の比高差は3.2m、北西部での曲輪２と曲輪３の比高差は6.7mを測る。現在城内へと続く小径は、Fig.33、42、44のごとく東の集落へと続く道に接続している。詰には現在永野神社が鎮座する。以上、本城跡は小規模な縄張りで、強い防御性や長宗我部期頃に相当する遺構は指摘できず、それ以前に機能した土豪層に関わる山城であった可能性が考えられる。城主は永野若狭守といわれ、後述の広瀬村の弘瀬権之守らとの争いが伝えられ、城跡の裾部に墓の伝承もある。地検帳では、城に関連する記述は、北東側に比定できる「城ノヲ」、「城ノキシ」のホノギのみである。

去坂城跡（Fig.50）　去坂名などが展開する高原状地形の東縁に比定されており、東は鏡川西岸まで急斜面となっている。現小字「城山」の所在する山丘は東斜面を除いて緩やかで、要害と呼べる立地ではなく、東側以外からの侵入は容易である。切岸も含めて防御施設は視認できず、頂部の比較的平坦な部分も狭く、普請についても判然としない。このようなものを現状から的確に評価することは難しいが、「城山」、「城山ノ根」の小字が現存する。地検帳での検討によれば、本城跡は去坂名の中核部から遠く、尾沙子名や針原名との境界近くに位置している。地検帳で本城跡に関連する記事はない。

城ノ森城跡　広瀬村中核部の対岸の尾根上に所在するといわれる。「詰、二ノ段、堀切（１条）、穴（径１m）２基、通路」が報告され、古井の森城跡の「本城」ともいわれる[40]。今回の踏査では遺構を確認できなかった。三方は急峻な斜面であるが、南側上方には広い緩斜面があり、この地形が当時まで遡るとすれば、戦術上最大の弱点になるものと考えられる。なお、付近は広く畠などとして利用されており、遺構が破壊されている可能性は否めない。城主は弘瀬権之守といわれ、西ノ森城の永野若狭守らと争っていたとの伝承がある。以上からみて、城跡が存在したとしても長宗我部期頃の構築や改修は考え難く、それ以前の土豪層に関わる城であろう。

吉原城跡、陣カ森城跡、狩山城跡　これら３城跡は、今回踏査を行っていない。付図２のさらに北方で、標高892mの山上に吉原城跡、1013mの山上に陣カ森城跡が報告されている。吉原城跡は、山裾からの比高差が460mを測る。報告によれば、両城跡とも各々長軸25m、21mの格円形の詰に高さ30～40cmの土塁が残り、これと約２mの比高差を持って幅1.5～４mの帯曲輪が巡る単純な構成である。稼働時期に他の諸城跡と重なる部分があったとすれば、それらとの比較により周辺の地理的・経済的条件或いは山城の機能差について検討できる興味深い資料といえる。吉原城跡は吉原名に属す。1559（永禄２）年に本山貞茂より送られた文書史料に残る川村兵庫介が吉原城跡の城主と伝えられるが、確かな史料等はない[69]。また、狩山城跡については縄張り図が作成されていないが、報告は類似した縄張りを推測させる[83]。

小浜城跡　既に詳説した。一定の防御性を認められる遺構、当地域では最大級の規模、交通の要所に近く川に囲まれた立地、城主の居所や墓に関する比定地や伝承がないこと、16世紀前半を下限とする出土遺物、長宗我部期頃といわれる遺構を持たないことを改めて指摘し、後に比較・検討する。

古井の森城跡（Fig.51）　３方を鏡川と東川によって囲まれた半島状の山丘に所在する。図示した各堀切間を縄張りとすれば、その長軸は約67mを測る。鉄塔が立つ詰は土塁内側の長軸18mを測り、周縁の一部には最大高0.5m、最大幅2.5mまでの土塁が残る。西側の曲輪に虎口が設けられており、入口の幅2.2m、奥行き3.5m、入口西側の土塁の高さ0.5m前後を測る。北斜面にある畝状の竪堀群のうち堀切とつながらない３条は、現状で各々幅2.5及び3.3m、深さは0.2～0.4mと浅い。３方の尾根筋は全て堀切で遮断され、西の堀切１が幅６m、底幅１m、深さは城内側3.6m、城外側0.9mを測る。北東の堀切２の外側には土塁と帯状の曲輪があり、土塁上面から堀切２の底までが0.6m、外側の曲輪との比高差が1.5mを測る。堀切２の幅は、土塁上面の高さで3.2m、北側竪堀との連結部では4.2mを測る。なお、堀切の外側に土塁と平場が形成される例は、堀切１でも観察される。詰の周囲の切岸は急峻で、最も比高差の小さい曲輪３からの高さ3.3mを測る。以上のように、詰以外にそれに匹敵する面積の曲輪を持たないコンパクトな縄張りでありながら、一定の防御力を確保しているものと評価できる。本城跡は'78年に発掘調査が行われ、詰で礎石建物が検出された[84]。なお、西方の尾根伝いでは岩が33mにわたって露出しており、巨岩群によって周囲でも際立った景観を呈している。以上をまとめると、城の構造や地形からは、既述の諸城跡に比べて高い防御性が認められる。川に囲まれた立地から推察できる戦術及び戦略上の特性については後述する。虎口や畝状竪堀群及び礎石建物については、これらの遺構が長宗我部期頃に普及したとの見方がある[69]。

本城跡周辺の地検帳での様相については既述のごとく、地頭分と土左山九名の境目で、地頭分の中切名に属している。土左山九名は原則的に「御直分」で占められる地域で、中切名は「公事分」と「名本分」に分かれ、本城跡は公事分に属している[66]。地理的には２つの河川が合流し、道も交わる水陸交通の要所であり、且つ土左山九名と地頭分という領域の境目である。広瀬村や中切名の復元によれば、当地点のこのような地理的重要性は当時も意識されていた可能性が高い。なお、現在東方の道から眺める本城跡は、河谷の間に立ち塞がる要害として映る。以上から本城跡は、長宗我

部期頃に構築又は改修され、当地点をおさえる機能を果たしていた可能性を考えておく。

梅ノ木城跡（Fig. 52）　尾根の端部に所在する。北に続く尾根は痩せ尾根で、特に西側の斜面は険しく、登行は難渋する。最北端の堀切から南部の曲輪４先端までの距離は90m強を測る。詰は長軸29.5mで、帯状の曲輪３との比高差は８mを測る。詰に入る虎口は、外側に30～50cm大の野面石による石積みがあり、城外側での高さは2.2mを測る。防御上の問題点である尾根筋に設けられた４条の連続堀切は、幅3.5から6.5m、深さ1.6から4.5mを測り、最大の堀切４の頂部には小段がある。堀切５は幅3.5m、深さ２m、堀切６は幅2.7mを測る。各堀切は、西側に比べると傾斜の緩い東側斜面に長く掘り下ろされ、竪堀となっている。切岸の有無については明瞭でない部分もあるが、自然の斜面自体が切岸の必要がないほどの傾斜を持っている。以上から本城跡には、例えば行川城跡や古井の森城跡に類するようなレベルの防御性が認められる。また、石積みを持つ虎口や連続堀切の存在は、長宗我部期頃の構築或いは改修を示唆する。さらに付図２でみると、本城跡は交通の要所に位置している一方で、地検帳から復元した梅木名の中核部とは、距離は遠くはないものの、実際は川や谷間を間において一定隔絶しており、依る山塊も別である（Fig. 39、42）。地検帳では本城跡に関する記述がないが、梅木名を給されている大黒氏の一族は長宗我部氏重臣で、大黒備前守は土左山九名の検地役人にもなっていることも併せると、本城跡には意識的に検地の竿が入っていない可能性も考えられる。以上、長宗我部期の当該地域支配を考える上で注目すべき城郭といえる。

行川城跡（Fig. 44）　谷に挟まれた山上に所在する。北西側斜面は谷により急峻で、南側も支谷が入り込む天然の要害である。西端の堀切から東端の堀切までの距離は110mを測る。詰の長軸は土塁内側で23.5mを測り、土塁上端と二ノ段との比高差は西部で９m、東部で6.8mを測る。詰を巡る土塁の高さは1.4mを測る西部から、東へ徐々に減じて東端では0.3mとなる。土塁の構造は、虎口などの観察によれば地山削り出しとみられる。二ノ段南西部から詰への上がり口も虎口状に削り出されており、その土塁は高さ1.4mで、岩盤から削り出された威圧感がある。西方の尾根には数mの間隔をおいて２条の堀切があり、堀切３が幅５m・深さ2.7m、堀切２が幅3.6m・深さ1.8mを測る。堀切１は幅５m・深さ2.8mである。これら堀切群は堅固な岩盤を掘削して構築されている。竪堀１は上方で幅4.3m・深さ2.4mを測る。堀切４は幅4.1mである。特に堀切５は、斜面を横に長く延びて堀切４とＶ字形に交わっており、詰と二ノ段の南から東にかけてが堀に囲まれている形となっている。なお、この交点東側でも高さ5.3mの露岩がみられるなど、本城跡では各所で堅固な岩盤が掘削されており、普請の困難さと共に、岩の城とでもいうべき往時の姿が推測できる。以上から本城跡の縄張りについては、まず詰を高い切岸で囲み、加えて腰曲輪や尾根を切る堀切で防御性を高めているといった把握も可能であろう。なお、現在の小径は竪堀１付近から北側の谷へとつながっている。他城跡との比較は後にまとめるが、以上のような諸事項からは、村落や土豪層との密接な関連が窺える城跡群との間に格差を看取することができる。また、畝状竪堀群や進化した虎口等、一般に新相といわれている遺構そのものは確認できないが、帯曲輪南西部付近の構造は、そのような新相の遺構を持つ他城跡と類似する部分もある。仮に、土豪層を超えるレベルの勢力の関与を考え

	番号	城跡名	遺構等	関連する地検帳の記述							伝城主	備考
				地域	村・名	村・名の所有権	ホノギ	地目	地積	該当地の主名請		
山間地域	1	未定	—	土左山九名	高川村	御直分	城	切畑	32代	村・名と同じ		名本分。非長。
	2	高川城	詰長軸10m、土塁高0.8m。	〃	—	—	—	—	—	—		90調
	3	西ノ森城	詰、帯曲輪、堀切、堅堀。	〃	桑尾村	御直分	城ノヲ 城ノヲノ下 城ノヲノ下 城ノキシ	切畑 切畑 切畑 切畑	1反 15代 18代 1反10代	村・名と同じ	永野若狭守	踏査。Fig.45。若狭守を率る永野神社現存。非長。
	4	城ノ森城	確認できず	〃	広瀬村	御直分	—	—	—	—	弘瀬権之守	踏査。非長。
	5	古井の森城	3.6×1m礎石建物跡、虎口、畝状竪堀群他。	地頭分	中切名	公事分・名本分	—	—	—	公事分	弘瀬権之守	踏査。発掘調査。Fig.51。長。
	6	大垣内城	土塁他	〃	大垣内村	吉松筑前	—	—	—	村・名と同じ	伊達入道→吉松筑前	踏査。Fig.48。非長。
	7	小浜城	堀切、切岸、帯曲輪他。	〃	コハマノ村	小浜次郎兵衛	フルシロ	切畑	40代	〃		今次調査。非長。
	8	大利城	滅	〃	太利村	太利民部	—	—	—	〃		踏査。
	9	今井城	堀切他	〃	下村	今井左近	—	—	—	〃	今井左近	踏査。Fig.47。非長。
	10	狩山城	滅。(堀切他、小規模)	〃		公事分・名本分	—	—	—	〃		県
	11	敷ノ山城	不明確。小規模。	〃	織山名	名本分	大シロ	下ヤシキ	38代	〃		太郎衛門ゐ。91調。
	12	柿の又城	滅。館か。	〃	柿又名	公事分・名本分	—	—	—	〃	前田民部	91調。村史他。
	13	吉原城	土塁、虎口他。小規模。	〃	吉原名	公事分・名本分	—	—	—	〃	川村兵庫介	発掘調査。非長。
	14	横矢城	曲輪、数十cm大の石。	領家山	横尾名	横尾名	—	—	—	〃		踏査。Fig.49。非長。
	15	梅ノ木城	4連続堀切、石積の虎口他。	〃	梅木名	大黒俸前守	—	—	—	〃		踏査。Fig.52。長。
	16	去坂城	不明確。小規模。	〃	去坂名	去坂名	—	—	—	〃		踏査。Fig.50。
	17	行川城	堀切、竪堀、出入口他。	〃	行川名	大黒与七兵衛	—	—	—	〃		踏査。Fig.44。長。
	18	中追城	堀切他。	〃	中追名	片岡大炊助	—	—	—	〃		県
	19	成山城	3条堀切、竪堀、土塁他	成山村	成山名	成山名(養浦様御持)	—	—	—	〃		養浦は長宗我部元親の姉妹。県。
高知平野北部	20	岡豊城	多数	江村郷			—	—	—	—	長宗我部氏	発掘調査。長。拠点。
	21	朝倉城	横堀、土塁、曲輪等多数	朝倉庄	城山村	御直分、大黒殿分他多数。	詰、二ノタン、三ノ旦、大門、他	荒、下ヤシキ	計8反30代5分勺	宗桃様他	本山氏→長宗我部氏	長。拠点。
	22	大高坂城	石垣	大高坂之郷	大高坂村国分分、他	大高坂殿分、他	大テンスノ下東ウラ、城ノフチ、他	下ヤシキ、上、他	24代、47代、他	西浜勘兵衛、大高坂殿、他	大高坂氏→長宗我部氏	発掘調査。長。拠点。
	23	杓田城	滅	杓田村	長尾ノ村	大黒分	城ノ前 同じノ上 同じ上谷入	中 中 下々	4反22代2分 36代5分 9代	大黒分	大黒氏	長か。

Tab.11　城跡一覧表（地検帳検討分）(1)

	番号	城跡名	遺構等	関連する地検帳の記述							伝城主	備考
				地域	村・名	村・名の所有権	ホノギ	地目	地積	該当地の主名請		
高知平野北部	24	福井別城	城	万々ノ村・円行寺・福井村三村	福井村	吉松分	シロノ東 同しノ下 同しノ西ノ上 同しノ上 同しノ城ノマエ	□ヤシキ 下ヤシキ 中ヤシキ 下ヤシキ 下ヤシキ	35代 41代3分 40代4分 10代 1反41代	吉松分		
	25	福井西城	城	大高坂郷	四郎ヵ岡村	井口分	西ノ城	下々ヤシキ	34代	井口分		
	26	福井中城	不良	〃	〃	〃	中ノ城	下々山ヤシキ	20代才	〃		市
	27	安楽寺山城	連続堀切、土塁他	久万村	久万村	久武殿分他多数。	久万城跡ノ内 同しノ内北小丘 同し西二ノ堺 同し東ノ門 同しノ西ホリノ外 同しノ南ホリノ外	皆荒 皆荒 皆荒 皆荒 下々畠 下々ヤシキ	42代4分 2代3分 10代5分 16代4分 5代2分 15代5分	城ノ詰 山崎喜兵衛旦 広井左兵衛旦 福留神兵衛旦 広井藤次作 久武殿分	伝久万豊後の墓あり	市、県。長か。
	28	秦泉寺城	横堀、連続堀切他。	秦泉寺郷	中ノ村	秦泉寺又衛門屋・中島殿分・森殿分他多数。	北森	アレ・城ノ内	12代	「秦泉寺城北森」	吉松氏→中島(秦泉寺)大和	「前福留報駄ゐタン」、中島。長。
	29	宮城	消滅、堀切	一宮庄	一宮之村	新田分、土東分、執行分他多数。	城ノ下 城ノ下 城ノ下 城ノ下 城ノ下	中 中 中 中 中	1反3代4分 32代1分 21代 1反42代 33代2分半	東執当定□ 国真左光 島田織部 山崎与十郎 前田源十郎		市
	30	布師田金山城	空堀、堀切、虎口、土塁他。岡豊城との共通点あり。				—	—	—		石谷民部→久武氏	中島。長か。
	31	布師田八頭城	城	布師田村	布師田村	執行分他多数。	城 同しノ西ウラ 同し 同し 同し道ノ西ウラ 同しノ西 同しノ西 同しノ西	上ヤシキ 下ヤシキ 下々 下々 中 中ヤシキ 中ヤシキ 中ヤシキ	24代1分 6代1分 6代2分 48代3分 1反13代 1反2代 20代3分 20代3分	執行分		
		—	—	万々ノ村・円行寺・福井村・三村	万々村	吉松分	奥ヤシキノ下東	上ヤシキ	42代3分	吉松分		「黒土居」
		—	—	久万村	久万村	久武殿分他多数。	土居ヤシキ	中ヤシキ	1反46代3分勺	久武殿分		「土居」

※註 (57)

Tab. 11　城跡一覧表（地検帳検討分）(2)

た場合、その目的の一つを、城の直下を通る道の掌握に求めることができる。付図2等でわかるように、この川沿いの道は当地域における東西方向の要路の一つである。

さて、先に地検帳でみたように、本城跡付近には行川名の中心部が復元できるが、当名は大黒与七兵衛の一村給地であり、彼の居所は指摘し得なかった。長宗我部氏重臣の大黒氏一族であれば、理解できる状況ではある。その他既述したような名のあり方と、本城跡との関係も注意される。なお、当城跡所在地の現小字は「城山外」である。

2．周辺の諸城跡

ここでは、上で対象とした地域に近接する地域を概観する。但し、これらの城跡については今回踏査を行っておらず、地検帳の記載事項と既往の各種報告を参照した。Tab. 11では中追城跡以下、

	番号	城跡名	遺構	伝城主	備考
山間地域	32	苔漕城			
	33	梶谷城			
	34	城城			
	35	都渕城			
	36	長畝城	不良。詰径11m。		市。非長。
高知平野北・北西縁部	37	前里城	滅		
	38	秦泉寺別城	不良。堀切、詰。		市
	39	喜武保守城	滅		
	40	万々城	連続堀切、竪堀他	吉松氏	中典。長。
	41	神森城	虎口、土塁他	神森出雲→非有斎	中典。不明。
	42	井口城	不良		
	43	福井元尾城	滅		
	44	小野城	堀切他。小規模。		県。非長。
	45	神谷城	堀切他	天文9年勝賀瀬越後の棟札	県
	46	加田城	掘切他		県
	47	鷲城	畝状竪堀群、堀切他、天然の要害	波川玄蕃	県。長。
	48	波川玄蕃城	詰に3.6×9.2m礎石建物、土塁	波川玄蕃	発掘調査。県。長。
	49	鎌田城	滅	波川玄蕃	県
	50	音竹城	連郭。堀切・竪堀群。		県。長。

Tab.12　城跡一覧表（地検帳非検討分）　※註（57）

Tab.12では前里城跡以下の諸城跡が該当する。

（1）高知平野北部

まず、付図2東部に所在する岡豊城跡は長宗我部氏の拠点であった城であり、天正年間まで機能している。高知市街部西端の朝倉城跡は、本山氏が高知平野支配の拠点とした城で、長宗我部氏も奪取後に拠点とした。大高坂城跡は現高知城にあり、戦国期には大高坂氏が拠った。長宗我部期には岡豊城にかわる本拠として計画・整備が進められたと言われるが、その時期や内容については未だ解明されていない。以上3城跡は、当該期の土佐において特に重要な拠点に含まれる。なお、長宗我部氏の拠点として浦戸湾口の浦戸城跡も重要であるが、対象地域外であるため割愛する。次に、布師田金山城跡、秦泉寺城跡、安楽寺山城跡、万々城跡では連続堀切、畝状竪堀群、横堀等が存在する。これらの遺構は長宗我部期頃に普及すると言われるが、地検帳をみれば秦泉寺城跡や安楽寺山城跡は廃城状態にあり、稼働時期についてはより細かい分析が求められる。これらの諸城跡は、高知平野を見下ろす山腹や丘陵上にある。井口から福井にかけての丘陵に所在する諸城跡も、平野部に突出した地形的特性を備えるが、後世の削平が著しく、遺構の評価は困難である。神ノ森城跡は標高300mに近い山丘上の要害で、視界も極めて良好である。筆者には同城跡の使用時期を縄張から判断することはできないが、既述のごとく長宗我部氏に重用された非有斎に管理された時期があったとの見方もある。

（2）仁淀川沿岸部

成山城跡を除き、地検帳で検討していない。まず鷲城跡は、1辺22m強の隅丸方形の詰を切岸と帯曲輪で囲む明解な構成で、周囲に10条に及ぶ畝状竪堀群を巡らせ、地形と相俟って高い防御性を実現している。波川玄蕃城跡では、発掘調査で礎石建物跡が検出されている。城主と伝えられる波川玄蕃は長宗我部元親の姉妹の婿であったが、天正8年に誅されている[60]。対岸の成山名は、地検帳では元親の姉妹の「御持」である。小野城跡は小規模で、遺構も堀切などが報告されるのみで、長宗我部期の構築や改修は考え難い。

3．小結

まず上左山九名から領家山にかけての諸城跡については、西ノ森城跡・今井城跡・横矢城跡・大河内城跡等と、小浜城跡・古井の森城跡・梅ノ木城跡・行川城跡の２つの群の間に、遺構や地形からみた防御性を中心とした差異が看取できた。前者を１類、後者のうち小浜城跡を２類、他の３城跡を３類と仮称する。２、３類は本稿中の城跡の中では比較的高い防御性が看取でき、３類は連続堀切や畝状竪堀群、礎石建物、何らかの空間を有する虎口（以下、これらを新相の遺構と呼称）などを有す。１類は上記の遺構群を持たず、防御性も２、３類に比べて低い。規模の上でも、両者には格差が看取できる（Tab.13）。このような差異には、時代性とも絡んだ城の性格の違いが反映されている可能性があり、３類に長宗我部期頃の構築或いは改修を想定する見方を引用した。そうすると、１類には村落や土豪層との関連が浮上してくるものが多く、長宗我部期頃にはそれらの多くを廃すると同時に、新たな枠組みで山城が再編された可能性が考えられる。上記の新相の遺構を有する城跡は本節対象中の山間部では多くはないが、該当する３類は、付図２からわかるようにいずれも当該地域の交通の要所に近接している。このような視点で城跡の立地を考えると、１類は属する村・名の中核部から隔絶されない背後の尾根上などにあって、主要路や河川には接していない場合が多い。大きな山塊の一所に選地し、麓からはかなりの比高差を持つが、防御性には不十分さが指摘できた。一方、２、３類は１類より高い防御性を実現しながらも、立地的には主要路や交通の要に接する。そのような非凡な立地を選択し、確保しているものと考えられる。そして、古井の森城跡や梅ノ木城跡のように、村・名の中核部との結び付きは考慮されていない例がある。このようなあり方から、２、３類は在地勢力が戦時に篭る山城というより、交通路をおさえることを目的に構築された山城であった可能性が考えられる。小浜城跡や古井の森城跡のような立地は篭城に適さない面も考えられることは後述する。また２類とした小浜城跡は、上記のような１類および３類との比較から考えると、土豪層を上回るレベルの勢力によって構築されながら、長宗我部期頃には廃されたものと位置付けられる。そのような推察は、地検帳の記述や当城跡付近の状況、出土遺物とも齟齬がない。なお、当地域の通行上最要所の一つである川口地区に新相の遺構を持つ城跡が所在しないことは、当該期、恐らくは長宗我部期頃には付近一帯の状況が安定化しているのみならず、交通路掌握の枠組みも変化していることを示すと考えられる。

次に高知平野北縁部から仁淀川流域にかけても、新相の遺構を有す城跡が所在する。麓城跡や波川玄蕃城跡は、仁淀川と高知平野から土佐西部へ向かう要路が交差する地点に位置する。

以上から、恐らく長宗我部期には、鏡川のような規模の河川の流域を超越する規模の交通や戦略、或いは仁淀川のような主要河川の水運統制といった課題が重要となり、そのような目的のために城郭の再編成が行われ、不要あるいは廃すべき城郭は廃された可能性が考えられる。ここで、その重視されたであろう交通路や河川の機能について付図２から具体的に考えると、まず鏡川上流に沿うルートについては、山間部を東西に貫く地域の要路としての機能の他、高知平野を通らない、或いは迂回する東西の連絡路としての機能や、高川地区などから分岐して北方の吉野川上流域へつなぐルートが考慮される。吉野川上流域は、「領北」と呼ばれる土佐北部山間地域の中核的役割と同時に、下流の阿波や瀬戸内地域との関係においても常に重要な役割を演じてきた地域で、長宗我部氏

城跡名	分類	防御性の優劣	主要路への近接	川に囲まれた立地	新相の遺構の存在	縄張り長軸(m)	詰の概面積(m²)
今井城跡	1	−	−		−	85	
大河内城跡		−	−		−	〔53〕	200
横矢城跡		−	−		−	〔70〕	〔130〕
西ノ森城跡		−	−		−	70	95
小浜城跡	2	＋	＋	＋	−	125	310
古井の森城跡	3	＋	＋	＋	＋	67	160
梅ノ木城跡		＋	＋		＋	90	300
行川城跡	3か	＋	＋			110	300

※対象地域内での比較による。＋－は存否や程度の高低を示す。
〔 〕は参考値。空欄は評価不能或は保留。

Tab.13 鏡村及びその周辺の城跡比較概念表

と土佐中央部の覇権を争った本山氏の本拠地も所在する。また、西部の仁淀川付近については既に村落の項で述べたように、水陸交通の要所となっており、上流の土佐北西部方面との関連も考えられる。もっとも城郭については、新相の遺構群が認められる城跡でもTab.11のように検帳では廃城状態のものが目立ち、一般に当時まで軍事的機能を保っていた城は一部とみられる[10]。しかし一方、新相の遺構群を有す城跡の分布は、長宗我部氏の有力家臣に給された村・名に所在する傾向を示している。当該期は急激な転換期であるために、このような事象を説明するには多様な視点からの検討を要するであろうが、既述のように有力家臣の給地では検地による把握の進行が窺えることなどからみても、長宗我部氏の発展過程においてこれら有力な家臣が効果的に配置され、軍事、交通や地域支配において機能したことが考えられる。

さて、最後に今回詳しく検討できなかった課題について、覚え書きをしておきたい。まず、既述の城跡のうち新相の遺構を持たないとみられるものの中に、標高、比高差ともに高い山上の城跡が存在する。吉原城跡、陣カ森城跡、狩山城跡等である。他の城跡群と比較した場合に、これらが山村の城であるのか、より広域の山城のネットワークの中で何らかの機能を担うものであるのかについては、山村の生産基盤や山間地域での城郭のネットワークとの関係で重要と思われ、今後の検討が待たれる。もちろん、そこには稼働時期の問題が関わってくる。また、本節前半で触れた柿の又城跡や敷ノ山城跡のごとく、現在の交通体系では不便な山間部であっても、かつては交通の要所であったと考えられる場所に近接する城についても注意される。これらについては、既述のような中広域的な視点と、より微視的な地域に密着した交通の両面を念頭に置いた検討を課題としたい。

次に、鏡川沿いの山城の立地について触れておく。中上流域の川沿いの山城は、侵食による急斜面を利用する場合が多い。中でも川が大きく蛇行する部分は格好の立地となり得るが、その選地には2つのパターンが指摘できる。第1は小浜城跡や古井の森城跡が該当し、川に囲まれた山丘上に構築される。第2は大利城跡、高川城跡、西ノ森城跡で、上記の城跡群と酷似する山丘あるいはその

付近に位置しながら、該当する山丘の付根等に小規模な城を築いていると考えられる[8]。両者の違いを考えれば、まず後者は地形的特性を特に活かすことなく、通常の尾根と同様の選地を行っている。集落との位置関係は密接で、大利城跡や西/森城跡では地検帳での「主居」や伝城主の墓も近在した。次に前者は、川自体を防御ラインの一つとすることができるのみならず、視界も良好であり、平時における被視認性も想定できる。その反面このような立地は、広義にはその山丘全体を縄張りとして考えなければならず、痩せ尾根などに構築する場合に比べて、より効果的な縄張りプランと一定の普請量を一般に必要とするであろう。また、優勢な攻城軍に包囲された場合には退路や補給路を断たれて孤立する可能性があり、防御施設や守備兵、物資が十分でなければその危険性はさらに増す。このような点は最終的に篭城する城としては不適当で、あくまで戦略的なネットワークのなかで真価を発揮し得る立地とも解釈し得る。さらに集落との位置関係については、それを優先した選地ができるとは限らないし、実際に古井の森城跡などは集落の中核部から隔絶している。その反面、川やそれに沿う道に接しており、それらを掌握する機能が想定できる。以上、互いに酷似した地形を呈する場所に構築されながら異なる選地を採る例があることから、両者の間に城の性格や、構築主体に伴う諸条件、それに時代的状況が絡む差異が存在する可能性を考えた。さらに事例を集成し、今後検討したい。

本節は前半で主として村落の復元を、後半では城郭についての検討を試みた。互いに無関係ではあり得ない問題であるが、筆者の力量により統合することができなかった。また、変動著しい時期を扱いながら、「一頃」などという表現を使用せざるを得ず、時期的な段階を踏まえた記述ができなかった。最後になったが、池田　誠、市村高男、筒井三菜、徳平　晶、中井　均、野本　亮、松田直則、山本浩之、吉成承三の各氏には様々な御教示を賜った（敬称略）。池田氏には、縄張りをはじめ様々な事柄についてご指導を賜った上に、縄張図の作成と掲載も承諾して頂いた。ここで筆者の力不足をお詫びするとともに、重ねて皆様に感謝申し上げます。

註

(1) 小林健太郎『戦国城下町の研究』大明堂 1985年・松本豊寿『城下町の歴史地理学的研究』吉川弘文館 1967年

(2) 松田直則「中世江ノ村の復元」『中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』（財）高知県埋蔵文化財センター 1993年・筒井三菜「中筋川流域における小村の景観復元」『間城跡』建設省/高知県教育委員会/（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2000年

(3) 『長宗我部地検帳 土佐郡上・下』高知県立図書館 1957年

(4) 『鏡村史』鏡村教育委員会 1989年

(5) 『土佐山村史』高知県土佐郡土佐山村 1986年も適宜参照した。

(6) 公事分の意味・内容については、高橋史朗「近世編 序編」註4に準ずる。

(7) 横川末吉「解説」『長宗我部地検帳 土佐郡 下』註3

(8) 『尾立遺跡―四国横断自動車道（南国～伊野）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（財）高知県埋蔵文化財センター 1995年

(59) 津野倫明「長宗我部権力における非有斎の存在意義」『海南史学第39号』高知海南史学会 2001年
(60) 「土佐国編年紀事略」註4より
(61) 市村高男「永禄末期における長宗我部氏の権力構造－「一宮再興人夫割帳」の分析を中心に－」『海南史学第36号』高知海南史学会 1998年
(62) 道は現在も残る。住民への聞き取りも行った。
(63) 『高知県遺跡地図』高知県教育委員会文化財保護室 1998年
(64) 註4
(65) 註4
(66) 註4
(67) 長宗我部氏による本山氏の平野部奥点攻略。決着はつかないが、史料は既に趨勢が決定しつつあったことを示す。
(68) 「土佐国蠹簡集」註4より
(69) 高橋史朗 註4より
(70) 註4
(71) 註4 1017ページ
(72) 註21
(73) 註4
(74) 高橋史朗 註4より
(75) 「土佐国蠹簡集本屑」註4より
(76) 註4
(77) 「土佐国蠹簡集本屑」、「神社明細帳」註4より
(78) 江戸から明治期の名称。現熊野十二所神社。
(79) 全て註4
(80) 蓮台村は古代後期からの山岳寺院の繁栄が想定される。引地名は大黒氏に給されている。定永村は1561年に今井氏に加給されている。いずれも各村・名の項で評述。なお久万川村も、寺が存在するが名本の居所が存在しない。
(81) 註2 松田
(82) 市村高男氏にご教示いただいた。
(83) 高橋史朗 註4より
(84) 鏡村史において横川末吉氏や秋澤繁氏を引用しつつ述べられている。
(85) 註4 382ページ
(86) 註4 447ページ
(87) 註7
(88) 例えば註1 小林では、久武氏の佐川城配任について、片岡氏に対する「目付的な機能」を想定している。
(89) 城跡に関する事項全般について池田誠氏、松田直則氏、吉成承三氏の懇切な指導を賜った。また、以下の今井～城ガ森、小浜～行川の各城跡では、各氏より現地で御教示頂いた。
(90) 1706年。註4より。
(91) 『高知県中世城館跡』高知県教育委員会 1984年・『土佐山村史』註5
(92) 以上、『吉原城跡』高知県土佐郡鏡村教育委員会 1985年より
(93) 1991年 遺跡詳細分布調査 高知県教育委員会

(44) 『古井の森城跡』註5より

(45) 以下の文献を参照した。池田誠「高知県」『図説 中世城郭辞典三 村田修三編』新人物往来社 1987年・中井均「織豊系城郭の画期－礎石建物跡・瓦・石垣の出現」『中世城郭研究論集』新人物往来社 1990年・松田直則「土佐における本拠と城郭体制」『第18回全国城郭研究者セミナー「本拠における城郭体制」』第18回全国城郭研究者セミナー実行委員会/中世城郭研究会 2001年。本見解については以下、註記を省略する。

(46) 本節前項で詳述。「御直分」、「公事分」は長宗我部氏の直轄地と認識されている。

(47) 『図説 高知県の歴史』河出書房新社 1991年

(48) 例えば朝倉城跡でも、地検帳では軍事機能は失われている。

(49) 高川城跡は今回未踏査で、大利城跡は消滅しているが、Tab. 11や周辺の状況からみて大規模な遺構や縄張りは想定し難い。

図表註

(50) Fig. 33 青線は現地籍一覧図の区画。赤字は地検帳のホノギと現地籍名が一致するもの。（ ）は検地順路より位置を比定したもの。青字は地検帳にはないが現地籍名より抽出したもの。

図中の記号は下のとおり。本節の以下の図も同様。

●	上ヤシキ	㊟ 主居・土居	――― （地図中）河川
■	中ヤシキ	㊦ 寺・堂	
▣	下ヤシキ	㊥ 神社	
□	下々ヤシキ	㊧ 城跡	

図中の各ヤシキ記号は、地検帳記載のヤシキを、比定できる地籍区画に並べたもので、詳細な地点等は表わさない。

(51) Tab. 6 「村・名の所有権」には、圧倒的地積の主名請となって、その村・名を給されているとみられる主体を記した。以下の表も同じ。

(52) Tab. 7 「棟札にある名称」欄の（ ）内は近世以降の棟札。

(53) Tab. 8 Tab. 8、9、10は高橋史朗氏に倣って作業を行い、特にTab. 8の鏡村分（芝巻、蓮台、行川、引地、唐岩、横、中追、上里、尾沙子、針原は今回計算した）については同氏の成果をそのまま引用した（註4）。今次の集計結果と地検帳の合計値との間に1代程度の差がある場合があるが、その場合、地検帳の数値に統一した。

(54) Tab. 9 計算は、分に換算して扣・作職人数で除した後、小数点以下を四捨五入して再び単位付けした。ヤシキ欄の（ ）は居ヤシキ。

(55) Tab. 10 備考欄に記したような、主名請が異なる筆は除外した。山畠ヤシキ、山ヤシキはヤシキとした。ヤシキタは田畠に含めた。主作分にヤシキは含まない。主作分は名本分主作、手作、名本分、主作の計。なお上下2段があるものについては、次例のとおり。

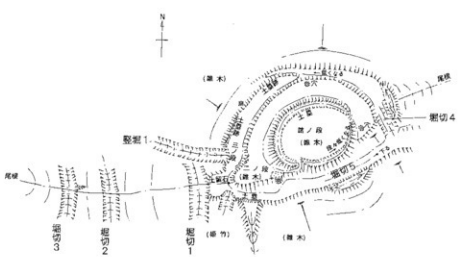
高川村		A	B	D
		名本分某扣	C	E
草宗名	全体	F	H	J
	名本分	G	I	K

B÷A＝D、（B＋C）÷A＝E

H÷F＝J、I÷G＝K

56) Tab.10 「主作」欄に算入した筆の地検帳での記述は次の通り。「主作」：芝巻村、大垣内村、コハマノ村、太利村、穴川村、永野村、永崎村、下村、定永村、狩山名、古原名、識山名、柿又名、的潤名、行川名、中追名、上里名。「手作」：梅木名。「名本分」：高川村、桑尾村、久万川村、広瀬村。「名本分名本扣」：津々見村、梶谷村。「公事分名本扣」・「名本分」：宝蔵村、三谷村。「公事分名本扣」・「名本分主作」・「名本分主扣」：中切名。「名本分主作」・「名本分扣」：草宗名。「主作」・「名本手作」：引地名。「手作」・「名本分」・「名本分手作」：唐岩名。「名本作」・「手作」：福名。「名本作」・「名本分某作」・「名本分手作」：増原名。「名本分某作」・「某扣名本分」・「某作名本分」：横屋名。「名本作」：竹奈路名。「名本作」・「名本分」・「某作名本分」・「名本分手作」：針原名。

57) Tab.11、12 番号は付図2に対応。縄張りや遺構について参照した文献・資料を備考欄に記した。「踏査」は今次調査したもの。「県」は「高知県中世城館跡 分布調査報告書」高知県教育委員会 1984年。「市」は「高知市の城跡」高知市教育委員会 1984年。「中典」は「図説 中世城郭辞典 三」村田修三編 新人物往来社 1987年。「91圃」は91年度遺跡詳細分布調査/高知県教育委員会。備考欄の「非長」は諸事項より長宗我部期の使用が想定できないもの、「長」は想定できるもの。「滅」は現在消滅、「不良」は遺存不良。各欄の「－」は記述なし。空欄は該当事項皆見になし。



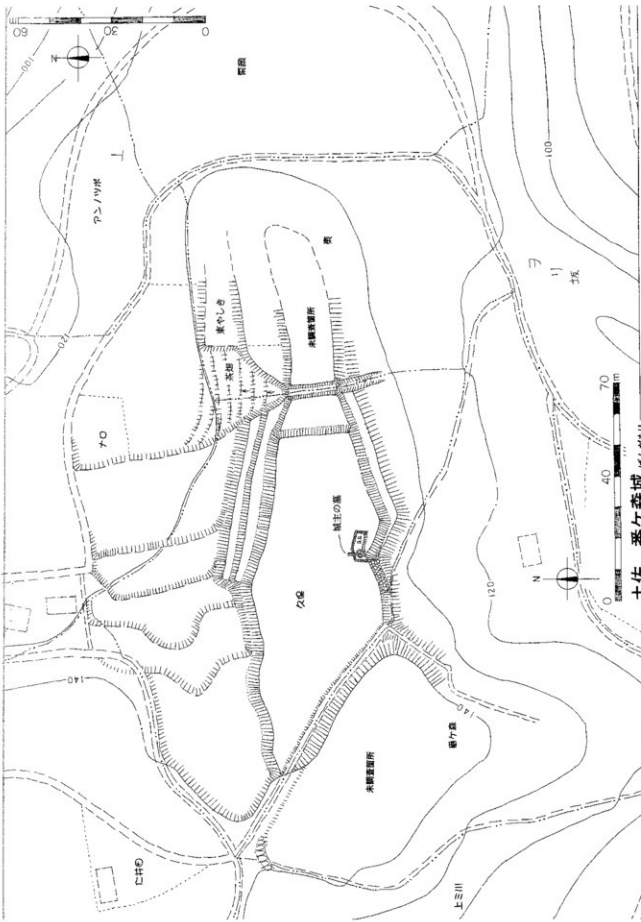
註57「高知市の城跡」より転載

Fig.44 行川城跡縄張図

(池澤　作図)

Fig.45　西ノ森城跡概要図

小浜城跡周辺の城郭縄張図　（図：池田　誠）



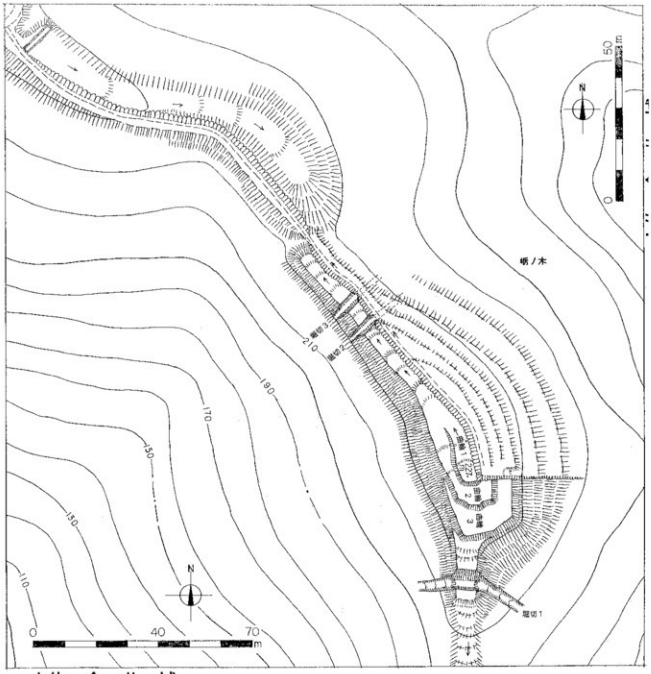


Fig.47 今 井 城 縄 張 図

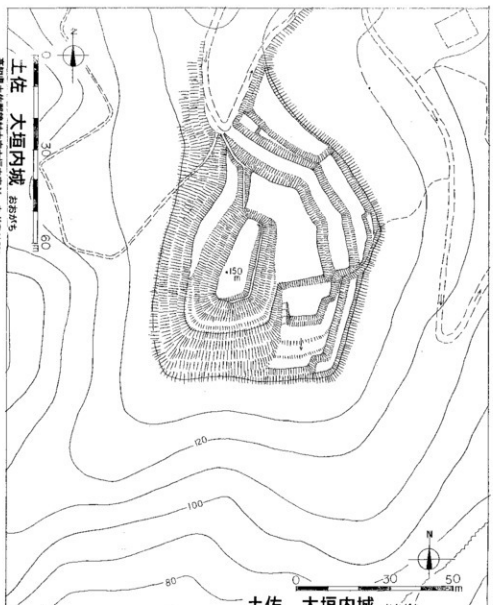


Fig.48　大河内城縄張図

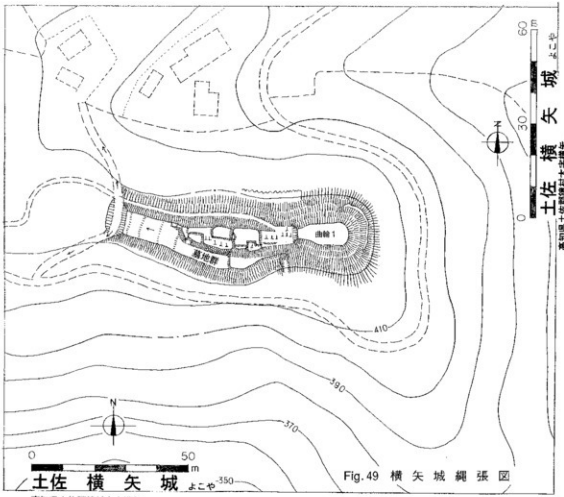


Fig. 49 横矢城縄張図

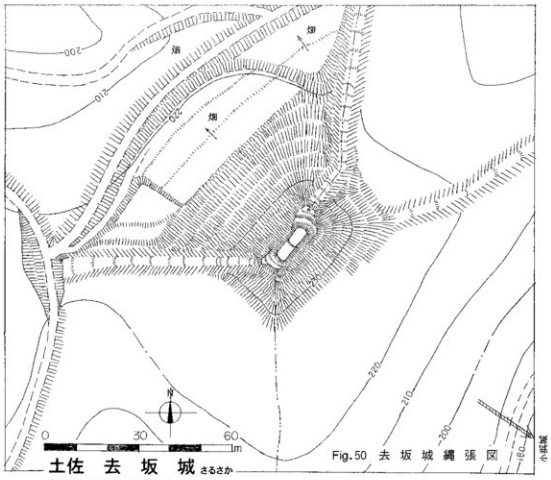
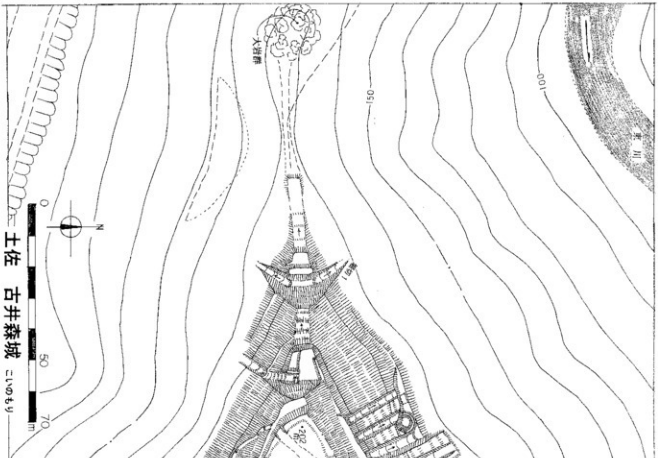


Fig. 50 去坂城縄張図



高知県土佐郡土佐山村大字中切下中切
調査作図　池田　誠　調査年2000.1.7　一部未調査箇所有り

Fig.51　古井の森城縄張図

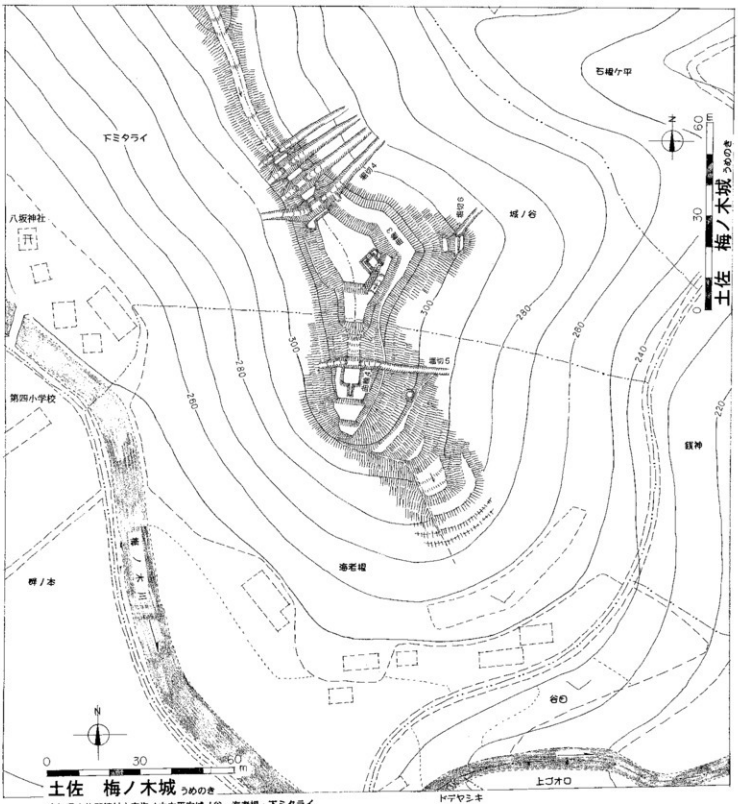


Fig.52 梅ノ木城縄張図

写　真　図　版

北より

南より

調 査 前 全 景

PL 2

完掘状態（南西より）

竪堀２（東より）

台状遺構１から北西方向

北より（手前 SD１、SK１検出状態・SB１・奥 台状遺構１）

曲輪２　遺物出土状況

PL 4

19グリッド付近（南より）

同　　上　曲輪１より

曲輪２　遺物出土及びSD１検出状況

遺物出土及びSD１検出状況（14グリッド北西より）

根太状遺構完掘状態

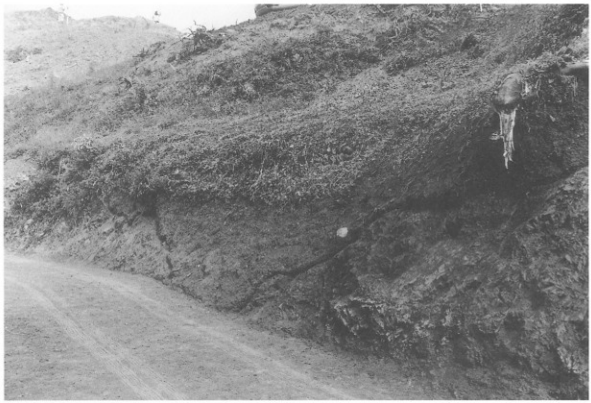
曲　輪　2

PL 6

SD１遺物出土状況（８Mグリッド　東より）

同　　上

堀切２　遺物出土状況（南西より）



堀切１　南西斜面部セクション（Fig. 8）

PL 8

堀切3　縦断セクション（北より）

今井城跡　北より（中央上が堀切2、3。曲輪は奥。）

南より

西より

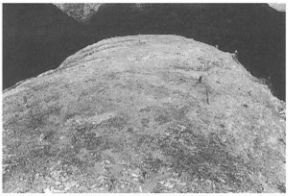
梅ノ木城跡

PL10

連続堀切（北より）

虎口石積　南東（城外側）より

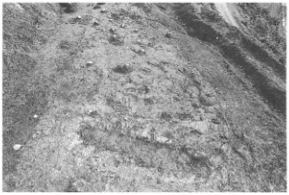
梅ノ木城跡



曲輪１完掘状態（南東より）

同　　左（北西より）

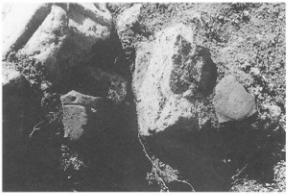
曲輪１南西セクション（Fig. 9）



根太ー１、SK１、SD１検出状態

曲輪２南部遺物出土及びSD１検出状況（北西より）

同　　左　曲輪１より

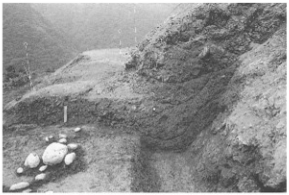


曲輪２遺物出土状況

根太状遺構完掘状態（北東より）

曲輪１、２

PL12



SD 1 付近セクション（Fig. 9）

竪堀 2 セクション（Fig.25）

集中 1　北西より

堀切 1 セクション（Fig. 8）

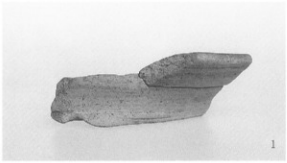
曲輪 3 と堀切 2 検出状態　曲輪 1 より

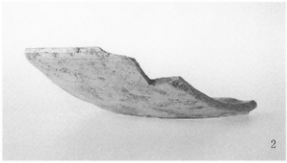
堀切 2 底　土器出土状況

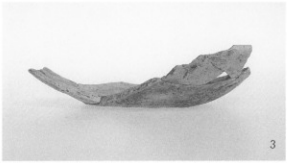
SK 1 完掘状態　東より

SK 2 完掘状態　南西より

竪堀、堀切、曲輪 3 、集中、土坑







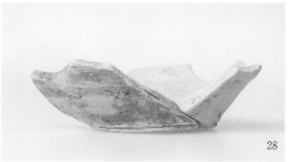
SD 1 出土皿・杯

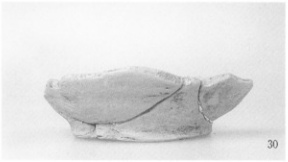
PL14

24

25

26


28


30

31

33

36

38

41

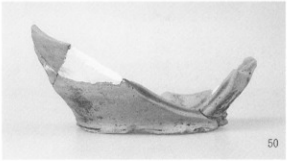
SD 1 出土杯

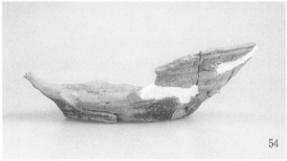
45

46

47

48


50


54

56

57

61

63

SD 1 出土杯

PL16

58

65

67

68

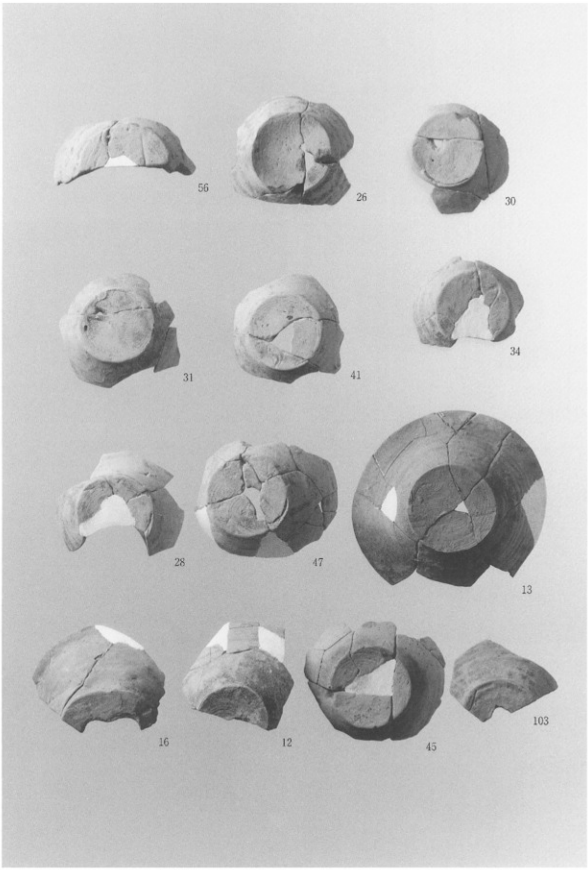
69

70

71

73

SD 1 出土杯

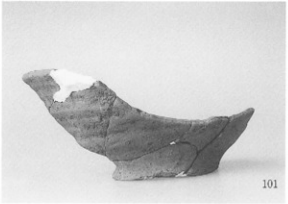


SD１、曲輪２出土杯（底部破孔）

PL18

74

89


101

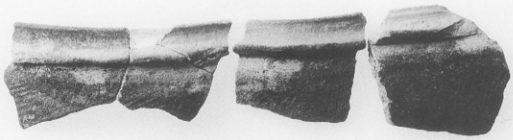
110

113

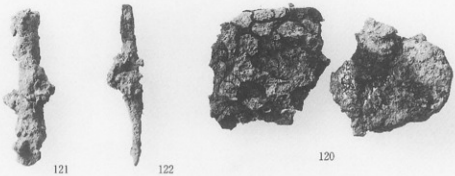
123

124

SD１、曲輪２、堀切２出土遺物



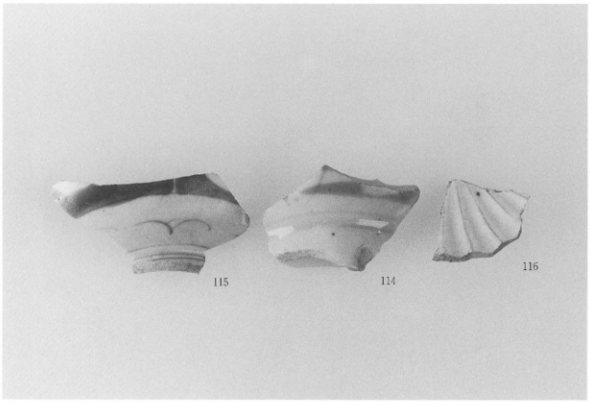
112

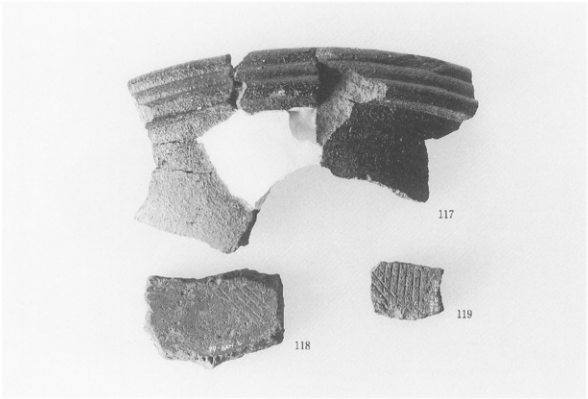


121 122 120

鍋・鉄製品

PL20





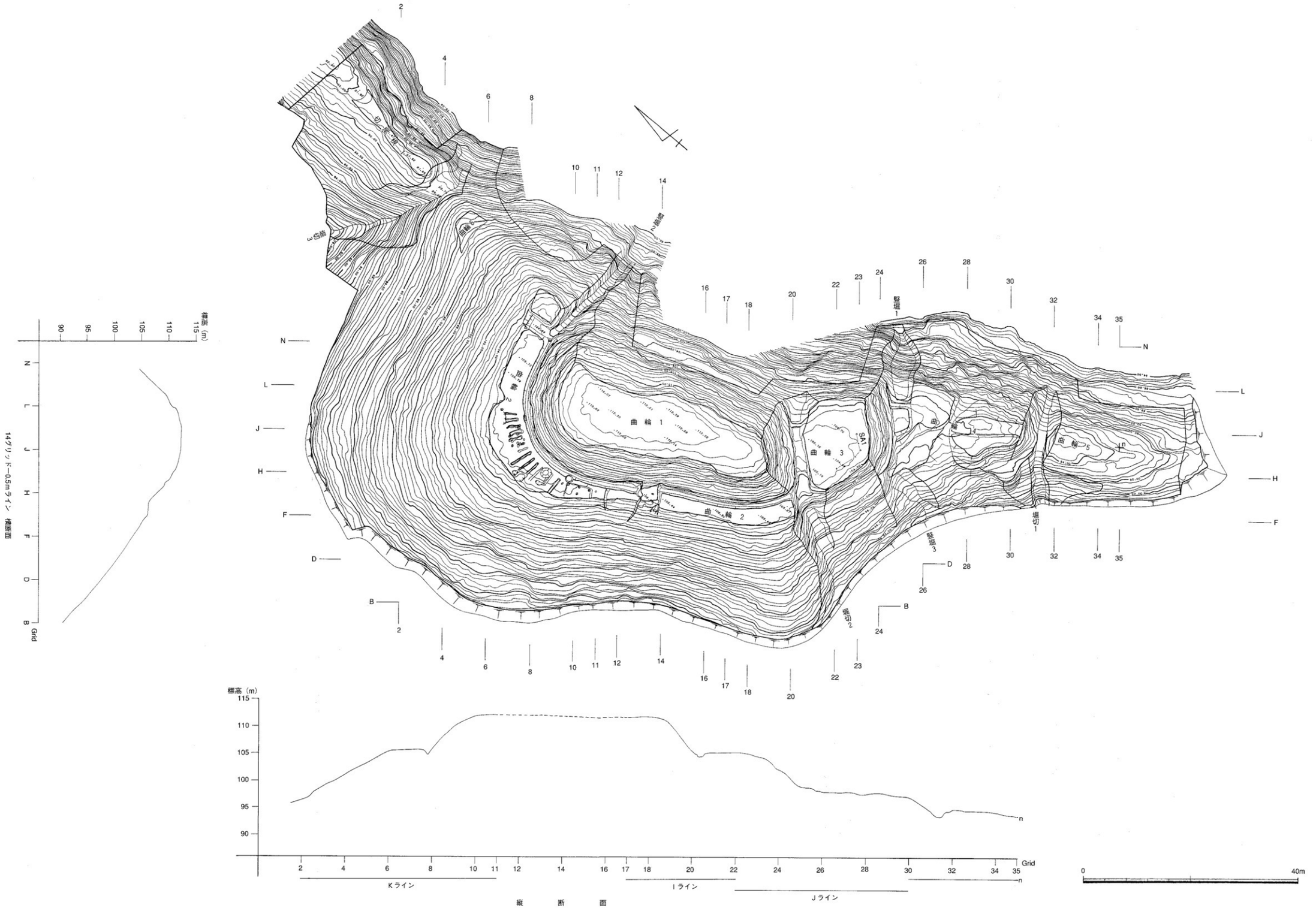
近世陶磁器

報告書抄録

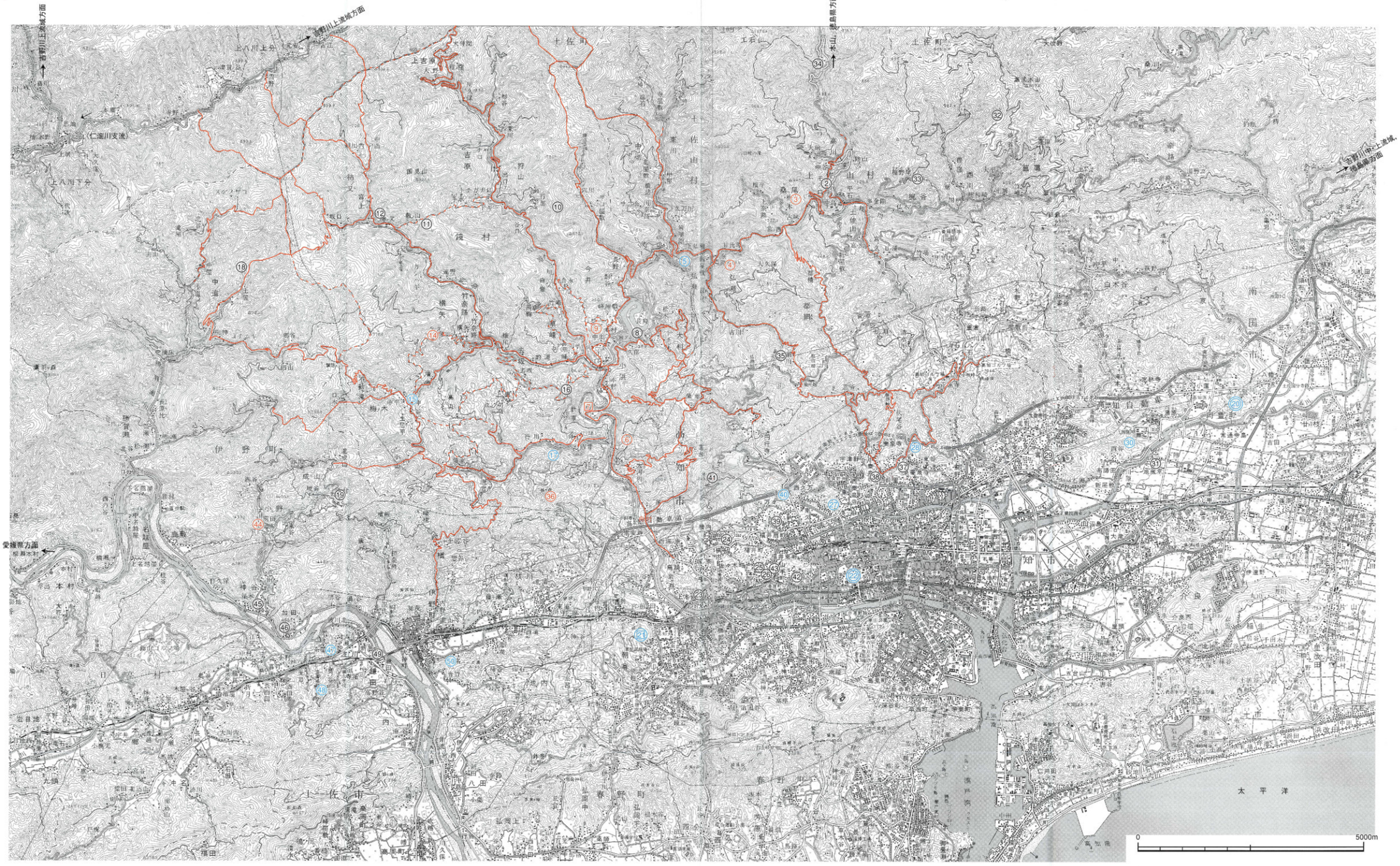
ふりがな	こ　はま　じょう　せき
書名	小浜城跡
副書名	城ノ平運動公園整備に伴う緊急発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	高知県土佐郡鏡村
シリーズ番号	第2集
編著者名	弘瀬友也・池澤俊幸
編集機関	高知県土佐郡鏡村教育委員会
所在地	〒781-3103　高知県土佐郡鏡村大利1番地　TEL (088)896－2525
発行年月日	西暦2002年3月29日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
小浜城跡	高知県土佐郡 鏡村　小浜 435番地2	39361	270006	33° 35′ 25″	133° 28′ 14″	1999年 8月9日 ～ 2000年 3月30日	8,000㎡	城ノ平 運動公園 整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小浜城跡	山城	中世	堀切・竪堀・ 掘立柱建物跡・ 根太状遺構・ 横溝状遺構・ ピット・ その他	土師質土器・ 瓦質土器・ その他	小規模城郭



付図１　小浜城跡　検出遺構全体図及び断面図



○ 長宗我部期頃相当の遺構を持たない城跡　○ 長宗我部期頃の遺構を持つ城跡　◎ 長宗我部氏の拠点城郭　○ 判断保留の城跡　— 近代の主な道（旧村とその周辺のみ。村史等より。）

詳細は本文参照。番号は Tab.11～12に対応。本図周縁部の城郭は未検討。

付図２　高知平野北西部周辺の城郭

小浜城跡

2002年3月

編集　高知県土佐郡鏡村教育委員会
発行　高知県土佐郡鏡村大利1番地
　　電話（088）896－2525
印刷　㈲西村謄写堂